

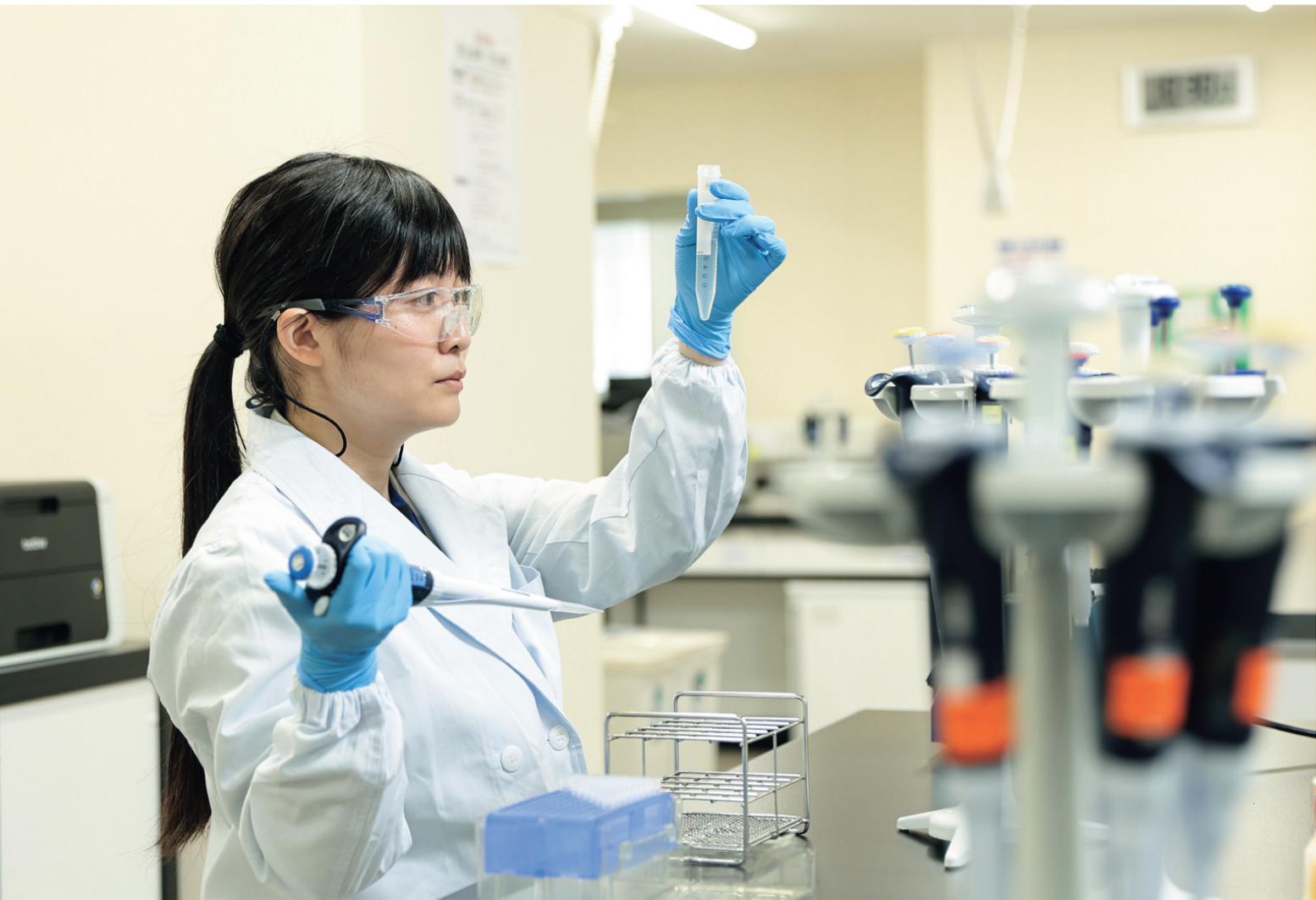
株式会社住化分析センター
創立 50 周年記念誌



Power of Chemical Analysis Service

SCAS の SHINKA





Analysis is at the core of all developments.

すべては分析に始まる

MANAGEMENT PHILOSOPHY 経営理念

分析および関連技術を基盤として、
お客様の求める新しい価値を継続的に創造します。

価値ある商品・サービスをお客様、
社会に提供することによって人と社会の発展に貢献します。

人を大切にし、活力溢れる企業風土を醸成し、
お客様、社会から信頼される企業として持続的に発展します。

住化分析センターの

SHINKA

進化・深化・真価

住化分析センターは
高度経済成長の只中にあった1972年、
環境分析ニーズの飛躍的な高まりを受け、
住友化学の分析・検査部門を独立させる形でスタートしました。

以来、多くのお客様からご愛顧いただき、
今では化学産業のみならず、幅広い産業分野のお客様の
課題解決に向けて分析、測定、評価を行う、
トータルソリューションパートナーへと成長しました。

そして今年、私たちは50周年を迎えました。
半世紀という大きな節目を前に、感謝の気持ちを込めて、
あらためて皆さまに私たちの歩みと情熱をお伝えするこの冊子を制作しました。

分析技術の進化と深化による私たちの真価を、
感じていただければ幸いです。

Progress, Improvement, Value



WHO WE ARE

住化分析センターとは

すべては分析に始まる 輝かしい未来の設計のために——
私たちは、最高の分析技術を通じて人類と社会に貢献し続けます。

Top Message

代表取締役社長

織田 佳明



真のソリューションを提供します。
お客様とともに進化を続け、

住化分析センターは、1972年7月1日、住友化学株式会社の分析部門から独立して設立されました。以来、時代の変化を捉えながら、あらゆる産業分野のお客様のご要望にお応えし、さまざまな課題の解決に取り組んできました。

当社の歴史は、日々研鑽を続ける従業員や、先見の明を持った先人たちの血の滲むような努力の積み重ねによって成り立っています。しかし、今日、50周年を迎えられた最大の理由は、私たちの分析・評価技術を常に信頼してくださったお客様の存在だと考えています。

当社がどんなに最高の分析・評価技術を持っていたとしても、お客様から対象となるサンプルをご提供いただければ、その価値を発揮することは

できません。お客様の貴重なサンプルを使わせていただき、高度なご要望にも必死にお応えすることで、当社の技術と人は進化してきたのです。

昨今の変化の激しい時代において、企業には新たなイノベーションはもちろんSDGsの実現に向けた取り組みが強く求められています。次の50年に向けて、当社はおお客様の進化に共生し、地球規模の社会課題の解決に貢献できる企業を目指してまいります。プロフェッショナルとして、分析・評価技術をもとに、お客様に真のソリューションを提供することで、お客様のイノベーションやSDGsの実現に貢献したい。そう考えています。

お客様とともに進化を続ける、当社の次の50年にご期待ください。

マテリアルサイエンス Material Science

半導体・電子部品・燃料電池などの
研究・開発から信頼性保証まで



分析、解析、評価を組み合わせた

トータルソリューション



ライフサイエンス・ヘルスケア Life Sciences and Healthcare

医薬品、再生医療、食品などの
研究・開発から信頼性保証まで



レギュラトリーサイエンス Regulatory Science

ICH、GLP、GMP、REACHなど
世界4極（日米欧アジア）の
各種規制対応

SHINKA 01

1970s-
1990s



SHINKA 02

1990s-
2000s



SHINKA 03

2000s-
2020s



半世紀にわたる私たちの歩み。それは決して平坦なものではありませんでした。
 業容の拡大や分析技術の研さん、経営管理体制の向上……。
 私たちの歩みは、移ろいゆく時代のニーズをキャッチし、
 お客様に寄り添い続けるべく、自らを変化させ続けてきた進化の歴史そのものです。

SOCIAL NEEDS

1970s-
1990s

産業公害防止のための
環境分析ニーズ

日本の高度経済成長にもかげりが見え始めた1970年代。石油危機によるエネルギー・資源の問題や、産業公害などの環境問題にも注目が集まり始めた時代でした。「環境庁」発足の翌年に設立した当社は、住友化学各工場の検査分析などを請け負いつつ、環境分析を主体に地区別の営業を展開。やがて科学機器事業など業容を拡大していきます。

創業・第一躍進期
(1972-1992)

分析技術を強みに、
積極的な業容の拡大を図る

SHINKA 01



1972年、住化分析センターは住友化学の大阪製造所内に12名で創業しました。大阪に続いて、大分、新居浜（愛媛県）、千葉、富山、岡山、筑波（茨城県）にも営業所を設立し、製品ジャンルの異なる住友化学各工場・研究所の分析を地区別に請け負っていました。当初、環境分析を主体に外部受託していましたが、競争が激化する中、石油危機以降は非環境分野にも進出していきます。

また、経営管理体制を整備するとともに全社的な営業組織を設け、積極的に業容を拡大していきました。さらに、医薬分野の分析を開始し、他社に先駆けて、GMPに準じた「医薬品の安定性試験」に進出しました。

分析受託を本業としつつも、科学機器事業にも進出しました。住友化学で研究・開発されていた技術を生かし、クロマトグラフィー用カラムや有機元素分析装置「スミグラフ」など、性能に優れた製品を次々と上市します。カラーシステム事業の「SICOMUC 20」システムや「AUTOLER」シリーズなどの商品群は、繊維・染色分野でお客様から高い評価をいただきました。

さらに、「クリーンルームエア分析」や「表面分析」で、電子・工業支援分野にも参入し、分析技術を強みに、お客様のさまざまなニーズにお応えする分析サービスを届けていきました。

SOCIAL NEEDS

1990s-
2000s

不況で高まる
アウトソーシングニーズ

バブル崩壊後、不況が長期化すると、社会的に本業回帰の動きが生まれ、「アウトソーシング」のニーズが高まるようになります。これに伴い、分析業界の規模も大きくなっていきました。先端技術の進展により、高度な専門性が要求されるようになる中、お客様が真に望んでいる、問題解決へのニーズにアプローチするようになります。



第二躍進期
(1993-2007)

分析サービスを進化させ、
日本企業の成長に貢献する



SHINKA 02

1995年、従来の長期経営戦略に替えて、当社は「新経営計画」を策定しました。現在までおよそ3年ごとに策定しているこの経営計画を軸に、より外部環境の変化に目を向け顧客満足に徹する会社運営を目指していきます。また、全国各地の事業所は公的な認証を次々と取得し、さまざまな測定体制を整備しました。

医薬品評価をめぐる事業環境が大きく変化する中、1995年にファーマ事業所を設置し、医薬・ヘルスケア領域のアウトソーシング化の動きに対応します。その後も受注が相次ぎ、設備の増強・人材の確保を重ね、2004年には医薬事業本部を発足し、営業・ラボ・技術開発の連携を図りました。

電子分野では表面分析の拡充を行い、半導体産業の好調時には汚染評価などで原材料メーカーを支えました。また、千葉に実験棟を建設し、機器類から発生する放散ガス試験の拡大を目指しました。さらに欧州指令 (RoHS、ELV) など環境負荷物質分析も軌道に乗り始めました。

工業支援分野は化審法関連試験や、社会問題となった食の安全に関わる残留農薬評価、食品容器の試験など、「安全・安心」関連の受託が増加しました。2007年には、国内外での規制強化の高まりを受け、化学品安全評価事業を分離、独立しました。

環境分野ではダイオキシン分野や土壌分析分野に参入し、土壌調査から設計・施工まで一貫して行う子会社「エンパイロ・ソリューション」を2005年に設立します。

また、世界へと事業を拡大するお客様の期待に応えるべく、シンガポールと上海に子会社を設けるなど、当社自らも変化を遂げていきました。

SOCIAL NEEDS

2000s-
2020s

多様化する
ソリューションニーズ

リーマンショック以降、半導体分野などは景気の動向を強く受けるようになります。当社はお客様と密着して課題を発見し、市場変動に影響を受けない事業構造への変革を目指しました。化学品では提案から申請までのワンストップサービスを国内外で行うなど、お客様に寄り添い、分野を問わず課題解決を提案できる企業を追求し続けています。



転換・再成長期
(2008-)

グローバルでの
総合的な分析力で、
豊かな未来をともに
つくる

SHINKA 03



2008年に発生したリーマンショックを受け、当社は不況にも対応できる組織へと変革を行い、成長軌道への回帰を目指していきます。ヨーロッパや韓国、台湾に現地子会社を設立し、海外への化学物質の登録申請業務を受託するなど、グローバルを舞台に、お客様のニーズに広く応え、コンサルティングを含む総合的な受託分析ニーズに対応できるようになりました。

事業環境変化を捉え、ラボおよび営業の拠点の集約や組織体制の見直しを行っています。また、社会やお客様のニーズに合わせ、開発支援から公定法試験まで分析・評価技術を用いてお客様に提案できる「総合分析・評価会社」を目指しました。特に医薬事業は積極的な分析評価技術とサービスを開発し、細胞医薬品や再生医療等製品の品質評価に関する商品 (分析評価サービス) の拡充・上市を続けました。また、業際領域の開拓にも取り組み、医療機器分析、VR (Virtual Reality) 危険性体感教育や感性価値評価などの新規事業も創出しました。

当社は、事業の多様化・高度化を通じて「お客様の課題解決を提案する企業」への進化を掲げています。「すべては分析に始まる 輝かしい 未来の設計のために 最高の分析技術を通じて 人類と社会に貢献する」—— 私たちの変わらぬ信念である、このコーポレートスローガンを胸に、これからも、お客様とともに、分析・評価技術のプロフェッショナルとして、社会に貢献していきます。

OUR PROCESS

お客様にソリューションが届くまで

分析業務

お客様との出会いから、分析結果のご報告に至るまでには、実にさまざまなプロセスを経ています。



紹介する

例えば、セミナーや展示会。まずは私たちからお客様の課題解決に当社の技術やサービスがどのように役立つかを分かりやすくご紹介することを大切にしています。



傾聴する

より良いご提案のためには、お客様のご要望を正しく把握することが大切。お客様からのご相談やお問い合わせにしっかり耳を傾け、お客様の課題を深掘りします。



提案する

お客様のご要望を受け、社内関係する部署とも連携してアイデアを出し合い、お客様にとってより良いソリューションをご提案します。

測定する

発注をいただくと、さあ、いよいよ測定です。大きくまとめると次のようになります。



整える

測定対象物や分析方法やその条件に応じて正確に測れるように試料の状態を整えます。

定める

測定のために、対象となる成分や測定条件を定めます。

はかる

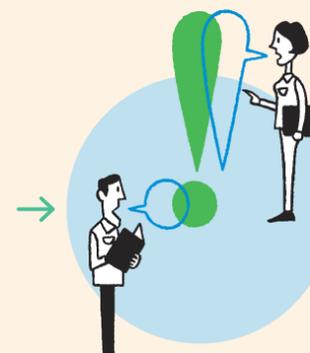
深さ・長さ・大きさを「測る」、時間や数を「計る」、重さを「量る」……さまざまな機器と知見を駆使してはかる、はかる、はかる!

捕らえる

電磁波や発光、反射光、回折した光など、目的物が発する情報を捕らえます。

記す

測定したデータや測定手順を、すべて正確に記録していきます。



評価する

測定結果を、蓄積した知識や既存の情報やさまざまな規格条件と比較したり照合したりしながら解釈し、統合して評価していきます。



報告する

指定された報告書などに評価結果をまとめ、良い結果も悪い結果も全てお伝えしています。なぜなら、お客様の事業に大きな影響を与えるという責任を自覚しているからです。

分析を支える業務

お客様により良い分析ソリューションをご提供するために、欠かすことのできない業務があります。例えば、こんな業務です。

管理する

お客様からお預かりした大切な試料の適切な管理と、分析装置を正常に動作させるために日々の定期的な保守・点検を行っています。



確認する

最新の法令・規則・規制を正しく理解し、それに則って適切・安全に分析業務を行っています。また、分析法の妥当性を科学的に立証する業務もあります。



認定を受ける

分析業務によっては、認定を受けた機関しか受託できないものもあります。認定を受けるために申請を行い、第三者による査察を受けています。



探究する

分析のプロフェッショナルである私たちの使命として、社会の変化によって新たに必要となる分析技術・サービスを常に探求しています。



挑戦する

お客様の成功に最善を尽くすため、失敗を恐れず未知に挑むチャレンジ精神を大切に、新しい技術の開発やサービスの向上に努めています。

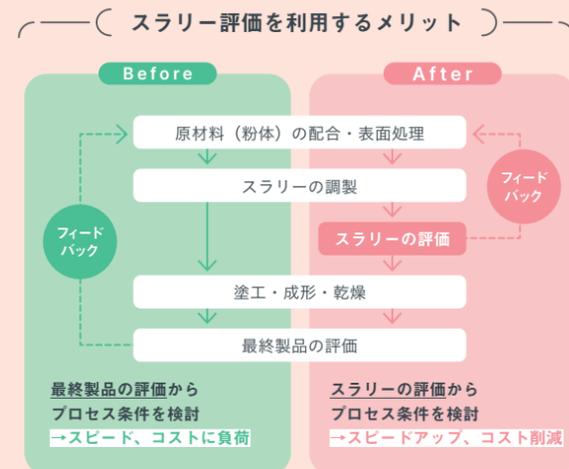


OUR SOLUTION

比類なきソリューション

開発を加速する
“勘”の見える化で、

マテリアル事業部
濃厚系スラリーの分散性・親和性評価サービス



濃厚系スラリーの評価体系を構築したことで、
お客様は最終製品にせずとも、その品質を評価できるように

近年、リチウムイオン二次電池や

燃料電池などの電極への利用が増える濃厚系スラリー。

ところがその調製や材料管理は、熟練技術者の経験や勘に頼らざるを得ず、
製造工程でのトライアンドエラーを繰り返すのが実情でした。

そこでSCASは、濃厚系スラリーの測定方法および評価体系を確立。

理想的なスラリーの状態を可視化することで、開発スピードの改善につなげるソリューションを生み出しました。



マテリアル事業部
大阪グループ
森川 正弘

大阪ラボラトリー
組成解析グループ
微小解析チーム（当時）
井上 真紀

技術開発センター
材料デバイスグループ
（当時）
今西 克也

マテリアル事業部
電子グループ
行嶋 史郎

スラリーづくりは熟練の勘頼み

それはまるで“秘伝のタレ”のようでした。さまざまな材料を最適に混ぜることで素晴らしい味を実現する。ただしレシピは料理人の勘頼み——。

「スラリー」とは、まさにそんなタレのように、特殊な機能を持つ微粒子を溶媒の中に分散させた液体状の混合物のことです。近年は、リチウムイオン二次電池や燃料電池の電極部分に粒子濃度の高い高粘度の「濃厚系スラリー」の利用が増えています。ところがこの濃厚系スラリーづくりが難しいのです。サービスの立ち上げを担った行嶋さんが言います。「ハチミツのような、粘り気のあるタレに粉を混ぜることを想像してください。均一に分散しづらい上、時間が経つと粉は沈みます。どんな濃度や混ぜ具合にすれば、最適なスラリーになるのか、そのさじ加減が非常に難しいのです」。

従来のスラリー評価は、光の透過を利用してその分散具合を確かめるレーザー散乱回折法などで行われてきました。しかし濃厚系スラリーの場合は、光の透過が可能なまでに希釈する必要があります。ところが希釈すると実際の使用状態とは異なるため、適正な評価ができないのです。結果として濃厚

系スラリーは熟練技術者の経験や勘に頼らざるを得ない上、その良し悪しは最終製品化されたものでなければ判断できませんでした。

“光”がダメなら“音”で測る

「分析法の確立が必要なわけではないか」。2015年頃、濃厚系スラリーの分散性評価をお客様から相談された行嶋さんや森川さんは、その可能性を見込み、早い段階から技術開発センターを巻き込んだ研究に乗り出しました。今西さんは言います。「全く新しい取り組みだったのです。専門性の高いメンバーが必要と考え、あまり前例はなかったのですが、早い段階で井上さんをはじめラボの皆さんにも加わっていただきました。最初は分析装置も中古品。少しずつ開発を進めたのです」。

自前主義を脱却して、その分野に明るいスタートアップ企業と協業したのも新しい試みでした。こうして社内外の知恵を総動員し、チームは技術的なブレイクスルーを果たします。“光”ではなく“音”の減衰を利用した超音波スペクトロスコーピーを用いることで、希釈せずにスラリーの分散性を測る解析法を商品化したのです。その後、

2017年には「人間ドック」のようにスラリーの状態を簡易診断するサービス「スラリドッグ」をスタート。お客様からの好評を受け、2019年には分散性の総合評価体系を構築し、スラリーの評価だけでなく、原料粉体やスラリーを塗布した塗膜評価まで適用範囲を広げていきました。

SCASの新たなスタンダードへ

開発当手を振り返り、今西さんはこう言います。「最初は周りから、そんなことできるわけないと言われました。でも挑戦してよかったです。チームで挑めば壁は乗り越えられることを経験しました。そして何よりお客様に喜んでいただけましたから」。井上さん、行嶋さん、今西さんもまた、一連の技術開発を通じて得たことがあると口を揃えます。「このサービスを提供していると、お客様と一緒に喜んでくださるんです。開発できて良かったなと本当に思います。お客様起点で考えることで、新しいソリューションは生み出せる。この手法をこれからのSCASのスタンダードにしていきたいです」。

OUR SOLUTION
比類なきソリューション

健康・安全事業部 医療機器の開発・申請支援サービス

“安全”を 化学の力で解き明かす

医療機器の生物学的安全性評価の国際標準規格である、ISO10993シリーズ。

このシリーズの中心となるPart1では、動物福祉の観点から、安全性評価の基本的考え方として

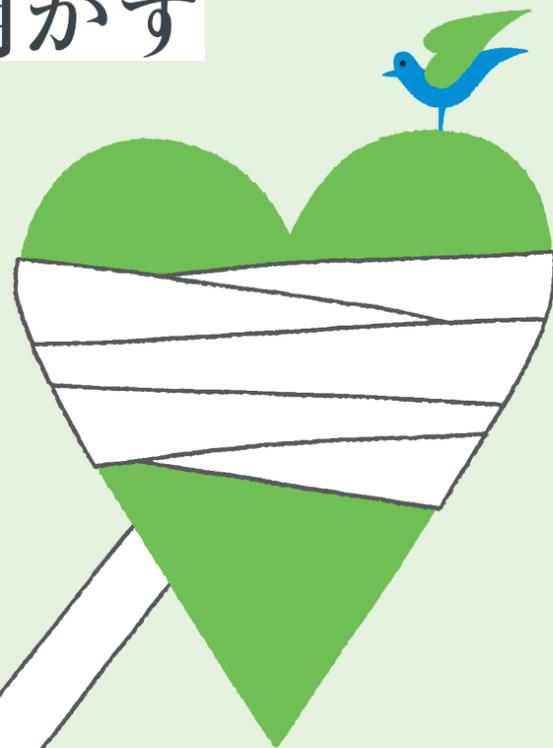
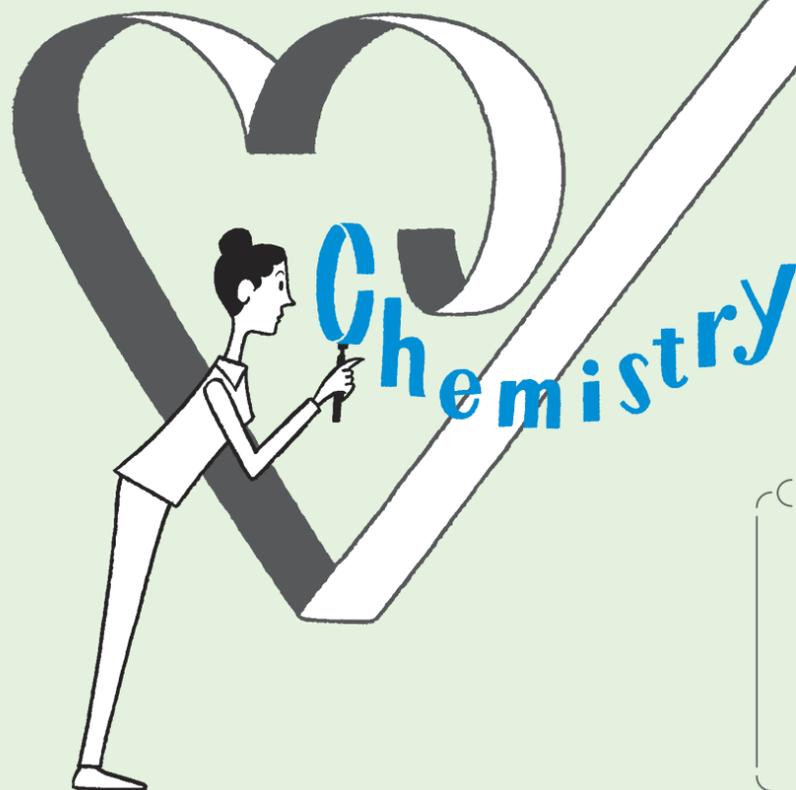
医療機器の物理学的・化学的情報の収集により

実験動物を使った試験を可能な限り削減することを求めています。

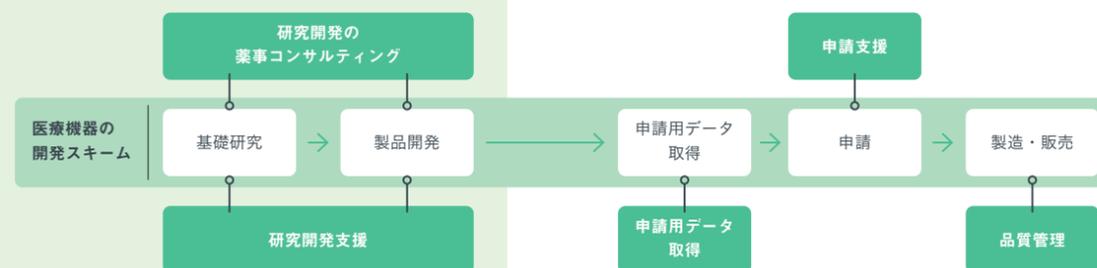
私たちは強みである化学分析および毒性学的リスク評価の知見を活かし、

医療機器の承認／認証申請サポートのほか、

機器の開発段階におけるコンサルティングも行っています。



（住化分析センターの支援サービス）



安全を評価する手段としての化学分析

医療機器は人の命を守るもの。ゆえに事前に厳しい規格や基準をクリアし、その安全性を立証する必要があります。一方で医療機器には多岐にわたる評価が必要で、それに応えられる試験機関は多くありません。「きっかけは、まさにそんなお客様のご相談でした」。医療機器の開発・申請支援サービスを立ち上げた佐渡さんはそう語ります。

サービス提供の開始は2010年。問い合わせは増え続け、2015年には医療機器評価の専門チームを編成するに至ります。ところが佐渡さんたちにとっては、それはゴールではなく、むしろ始まりでした。

2018年、ISO10993-1が改訂。欧米を中心とした動物福祉の流れから、生物学的安全性評価を行う際、動物試験を実施する前に、まずは化学分析に基づいたリスク評価を優先することが示されたのです。化学分析を得意とするSCASへの問い合わせはますます増加。千葉ラボラトリーで技術者をとりまとめる内原さんはこう打ち明けます。「悩みました。化学分析の強みを活かせるとはいえ、分析結果をどう組み上げていけば、生物学的安全性を立証できるのか。その道筋をゼロから組み立てていかなければならなかったのです」。

個ではなくコミュニケーションで解く

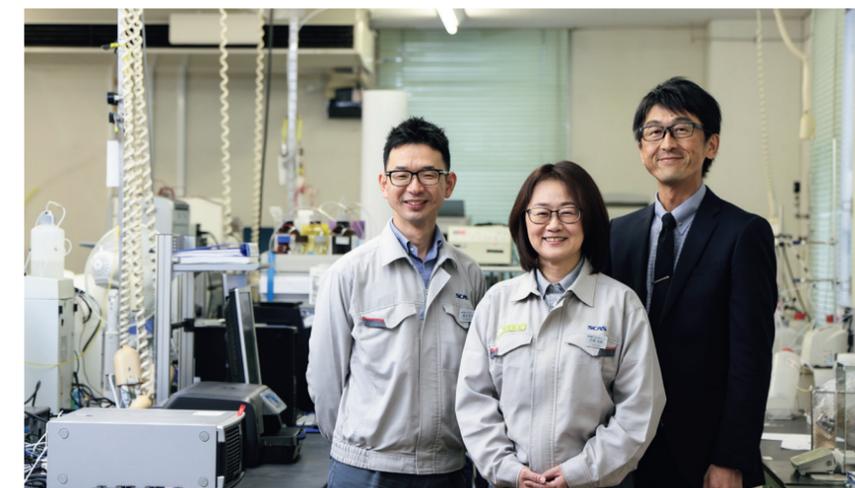
ひとくちに化学的分析と言っても多くの手法があり、その結果に対する毒性評価も含めると多くの技術者が関わることになります。解決の糸口は、個ではなく多様なメンバーによる協働にありました。「適切な評価に導くためには、関わる技術者全員が一連の試験目的や、立証すべき事項をしっかりと理解する必要がありました。その意味では事前のコミュニケーションがとても大事になり、徹底的に連携するようになりました」（福永さん）。

密に連携したのは社内だけではなく、技術者自身も、お客様の元へ度々足を運ぶようになりました。「医療機器が人体に対して毒性を発現する場合、多くは医療機器そのものではなく、医療機器からの溶出物が原因となります。そこにどんなリスクがあるのかを見極めるには、お客様と連携し、どんなシチュエーションでどう使う機

器なのかを深く理解することが不可欠だったのです」（佐渡さん）。

ガーゼからMRIまで

SCASの化学分析の力を結集することで、今、「医療機器の開発・申請支援サービス」は重要なサービスの一つにまで成長しました。医療機器はガーゼからMRIといった大型機器まで多様な製品群が存在します。それらに対し、SCASは多岐にわたる化学分析手法を強みに、評価のみならず、お客様の悩みに合わせたコンサルティングまでを提供できるようになっているのです。内原さん、福永さんが言います。「私たちの仕事は極論すれば、何かを数値化することです。でもその数値が製品の安全を証明し、命を守ることにつながります。“すべては分析に始まる”というコーポレートスローガンを大切に、これからもこの仕事に向き合っていきたいです」。



千葉ラボラトリー
微量解析グループ
福永 辰也

千葉ラボラトリー
微量解析グループ
内原 有紀

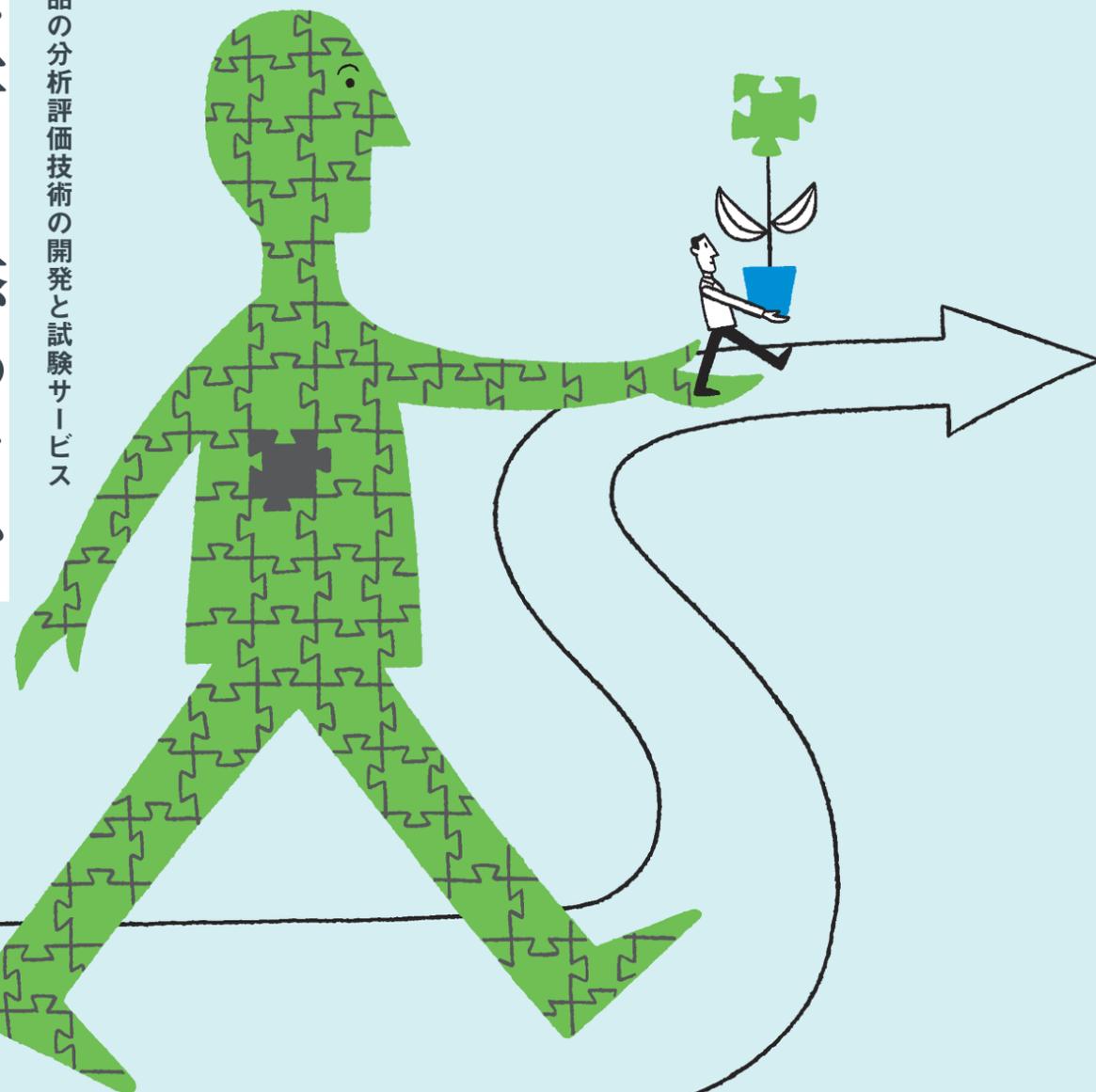
健康・安全事業部
ヘルスケアグループ
佐渡 学

OUR SOLUTION
比類なきソリューション

日本の医療を一步先へ
お客様に寄り添って、

医薬事業部 再生医療等製品の分析評価技術の開発と試験サービス

2012年の京都大学iPS細胞研究所の山中伸弥先生のノーベル賞受賞をきっかけに、その期待がますます高まる再生医療。
SCASでも、早期から細胞評価技術を整備するとともに、2016年に安全性評価サービスを開始。
以後もお客様のニーズに応えるべく進化を続け、
2021年度からは事業拡充のため大阪ラボラトリー内に分析4号棟を新設しました。
開発メンバーはフォーラムやコンソーシアムへも意欲的に参加し、
日本の再生医療分野のさらなる発展にも尽力し続けています。



医薬事業部
CMC・細胞医薬グループ
猪狩 民行

技術開発センター
ライフサイエンスグループ
(当時)
岩田 美紀

大阪ラボラトリー
CMCグループ
バイオ医薬チーム
大野 修

分析4号棟に導入した最新鋭の機器。
ドロップレットデジタルPCR、フローサイトメーター、
自動微生物培養検出装置 (BACT / ALERT™) などを完備

期待に応える多彩な分析サービス

「お客様に寄り添えることだと思います」。再生医療等製品の分析評価事業の強みとは？——この問いに、医薬事業部で営業を務める猪狩さんはそう答えます。

バイオテクノロジーは今、医療に欠かせない存在です。中でも2012年、山中伸弥先生のノーベル賞受賞は象徴的でした。これを機にiPS細胞を用いた再生医療への期待はさらに高まり、SCASも市場調査に乗り出します。2014年には「細胞製品に関する品質評価」をテーマに、申請対応試験の商品化に向けた開発をスタート。2016年に微生物関連試験のトータルサービスをいち早く開始しました。加えて2017年からは再生医療等製品の評価技術や産業化に向けた支援技術の開発にも着手。iPS細胞由来の細胞や組織製品そのものだけでなく、原材料の品質評価や、製造工程管理試験や製造時のトラブルシューティングにも対応できるよう知見を重ねてきました。猪狩さんの語る「お客様に寄り添う」姿勢は、まさにこの多彩な分析サービスに表れています。

最先端の「視点」「技術」「志」

では、なぜここまできめ細やかなサービス開発が可能なのでしょう。事業開発に長く関わる技術開発センターの岩田さんはこう話します。「外部との接点の多さが一つのポイントだと思います。私を含め技術開発センターの所員は、再生医療分野で先端に行くメーカーと、開発当初からさまざまな形でコラボレーションしてきました。この期間に専門的な最新技術だけでなく、お客様の視点を学べたことは、私の財産になっています」。外部との交流はこれに留まりません。昨年度まで神戸産業医療都市参画企業でつくる神戸再生勉強会に所属、再生医療に携わる製薬メーカーやアカデミア、PMDA*関係者が集う環境で日常的に技術交流を重ねてきました。「とりわけ、この分野で著名な先生方に技術指導をいただいたことは、業界に先駆けて品質の高いサービスを確立できた要因の一つです。お客様からも厚い信頼を寄せていただいています」(猪狩さん)。

*PMDA：独立行政法人 医薬品医療機器総合機構。
厚生労働省所管の独立行政法人で、医薬品・医療機器・再生医療等製品の承認審査・安全対策・健康被害救済の3つの業務を行う。

「寄り添う」は社風

2021年、SCASは再生医療等製品の分析サービスの拡大を見据え、大阪ラボラトリー内に分析4号棟を建設しました。分析業務の指揮を執る大野さんは今、SCASがお客様の“ファーストコールカンパニー”になりつつあると感じていると言います。「でも、現状に満足するつもりはありません。再生医療分野は今も発展途上。お客様に寄り添う姿勢をこれまで以上に大切にしていきたいです」。岩田さんが続けます。「寄り添う姿勢はSCASの社風だと私は思います。みんなこの仕事が好きで、好奇心旺盛で、ひたむきです。お客様と同じ目線に立ち、試験結果に関してなぜその結果なのかという気づきを共有し、お客様の細胞の特徴を反映した最適な試験をご相談しながらつくりあげていくことが習慣化しています。再生医療を通じて、今まで治せなかった怪我や病気を治したい、より早く患者さまに届けたい。その想いでこれからも取り組んでいきたいです」。

日本の医療を前進させるという大きな夢を心に、チームは今日も、小さな細胞に向き合い続けます。

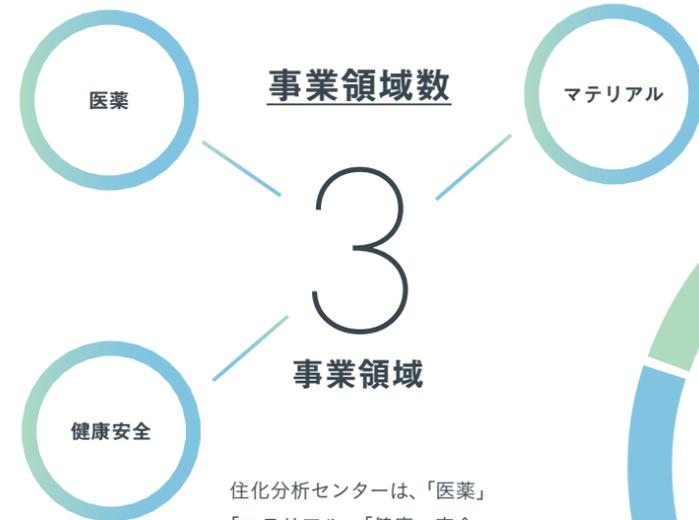
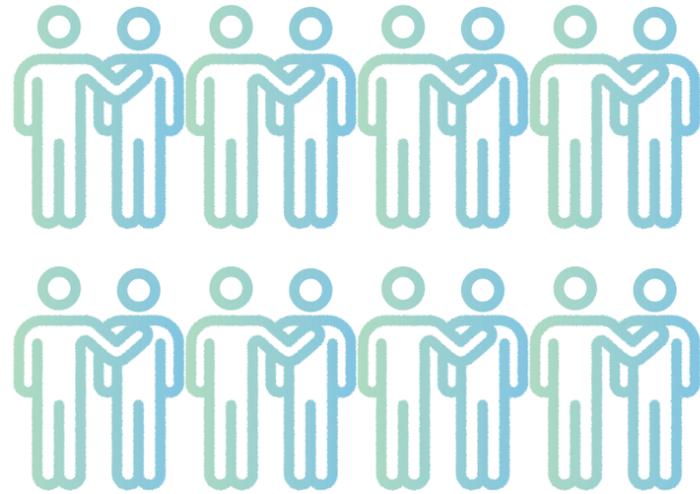
SCAS IN NUMBERS

数字で見る住化分析センター

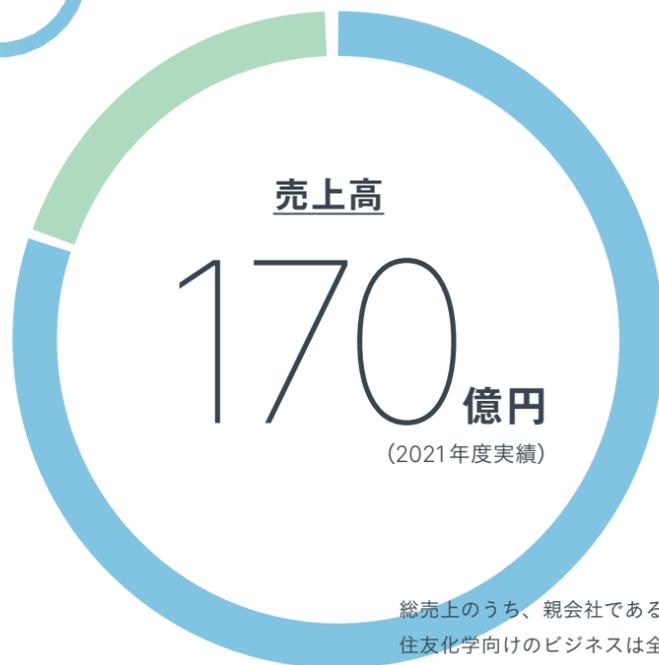
社員数

1,120人
(2022年3月末現在)

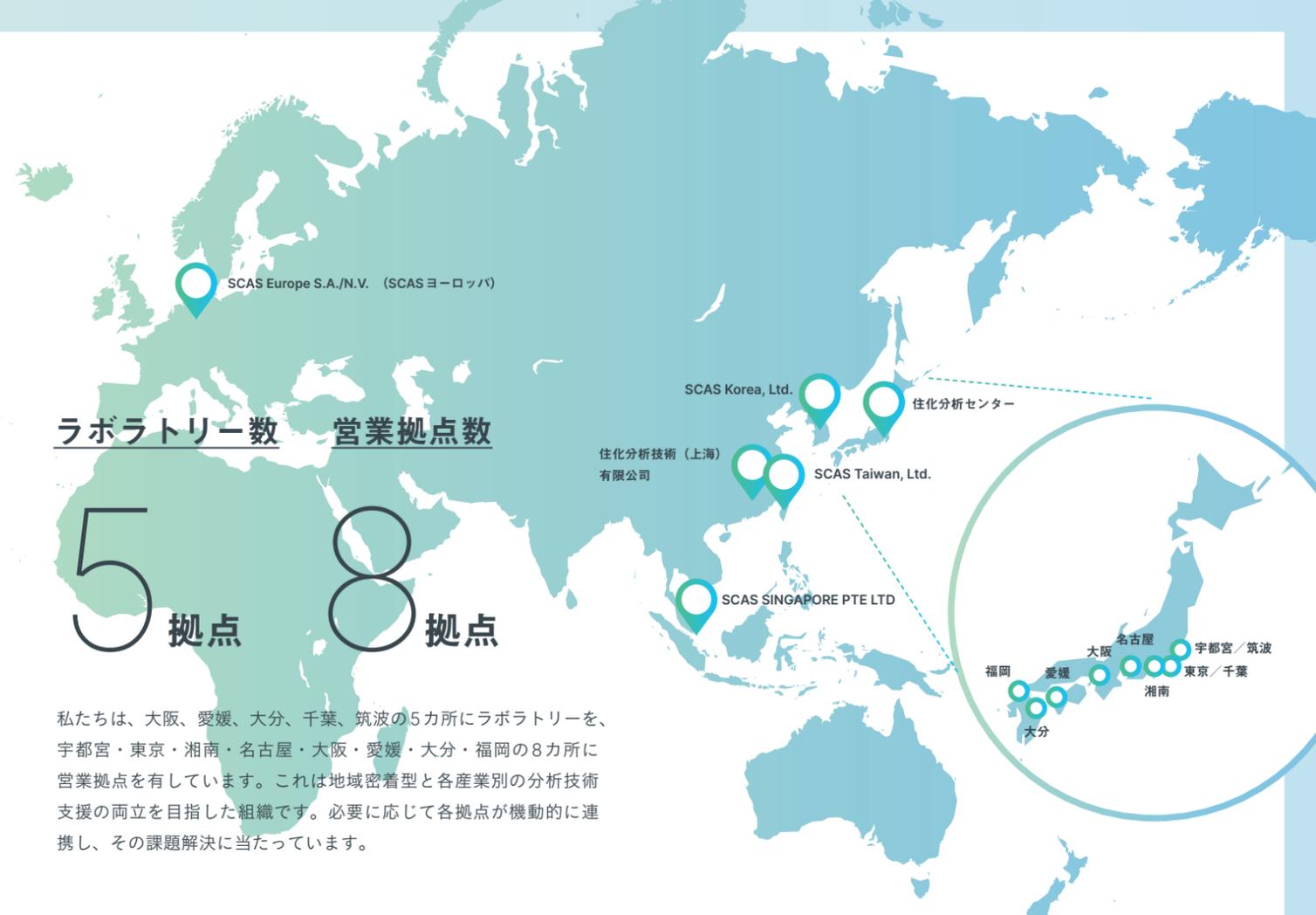
国内最大規模の総合分析会社ゆえ、従業員数も多く、しかもその9割以上を技術系人材が占めています。多様なプロフェッショナルによる技術とサービスが強みです。



住化分析センターは、「医薬」「マテリアル」「健康・安全」にわたる幅広い事業領域を有する、分析・測定・評価のトータルソリューションパートナーです。分野の幅広さだけでなく、お客様の製品の川上から川下まで、そのライフサイクルすべてをカバーするサービスをお届けできます。



総売上のうち、親会社である住友化学向けのビジネスは全体の約2割です。親会社よりも、広く一般企業に向けた事業活動を積極的に展開しています。



私たちは、大阪、愛媛、大分、千葉、筑波の5カ所にラボラトリーを、宇都宮・東京・湘南・名古屋・大阪・愛媛・大分・福岡の8カ所に営業拠点を有しています。これは地域密着型と各産業別の分析技術支援の両立を目指した組織です。必要に応じて各拠点が機動的に連携し、その課題解決に当たっています。

海外拠点数

5 拠点

シンガポール、中国・上海、ベルギー、韓国、台湾の5カ所に海外拠点を設置。そのうちシンガポール、中国・上海、台湾の現地ラボでは受託分析を行っており、日系企業のみならず数多くの海外企業のお客様からも高い評価をいただいています。またベルギー、中国・上海、韓国には化学品申請担当者を配置し、申請代理人業務も行っています。

コーポレートサイトへの分析技術事例(テクニカルニュース)掲載数

304 件
(2022年5月現在)

コーポレートサイトに現在掲載されている、当社の分析関連技術やソリューション事例の数です。技術や事例の多様さはもちろん、それらの事例を手法別、目的別、製品別に検索することもできます。



誰かが誰かのために、未知なる世界に挑もうとしている。

分析は、その「一過程」に過ぎません。

しかし一方で、あらゆる技術が高度に発達した現代社会において、

「新しい何か」を生み出すためには、

最先端の技術と最新鋭の装置をもってその品質や安全性を保証する、

「分析」「測定」「評価」が、決して欠かすことのできないものになっています。

だからこそ、私たちはたとえ「一過程」であっても、

お客様の本当の困りごとを解決する、

価値ある「ソリューション」をお届けしたい、

という誇りと責任を胸にこの仕事に向き合い、

私たち自身も絶えざるSHINKAを続けてきました。

「すべては分析に始まる」。

このコーポレートスローガンに込められた、

私たちの静かなる“熱”を少しでも感じていただけたのなら、

これに勝る喜びはありません。

お客様にとってさらに価値あるパートナーを目指して、

次の50年に向けて、さらなるSHINKAに努めていきます。





SCAS Sumika Chemical
Analysis Service
株式会社 住化分析センター